

コミュニケーション力の育成

森 敏昭

1. OECD 調査結果が意味するもの

新聞紙上で報道されたのでご存じの方も多いと思うが、昨年12月7日に、経済協力開発機構（OECD）が世界41カ国の15歳の生徒を対象に実施した「生徒の学習到達度調査（PISA）」の結果が公表された。それによると、2000年の調査では1位であった「数学的リテラシー」は6位に後退し、「読解力」は8位から14位にまで落ち込んだ。学力低下は、また一步、着実に進行したようである。したがって、もはや「我が国の小・中学校段階の児童・生徒の学力は、全体としておおむね良好である」などと楽観視すべき時ではない。とりわけ、1位グループの座から滑り落ちた「読解力」の落ち込みは、深刻に受け止めるべきであろう。

では、我が国の子どもたちの学力は、このまま長期低落傾向への道をひた走るのであるか。このまま何の改革も行わずに座視していれば、おそらくそれが必然のシナリオであろう。また、たとえ「ゆとり教育」から「基礎学力重視」へと路線を切り替え、教科内容3割減ではなく3割増のカリキュラムを導入したとしても、学力の長期低落傾向に歯止めがかかるとはならないであろう。なぜなら、我が国の子どもたちの学力低下は、「量の低下」ではなく「質の低下」だと考えられるからである。したがって、我が国の教育界が取り組むべき急務の課題は教育の「質」の改革であり、そのためには学力の「質」を問い直すことが不可欠な条件となるであろう。

2. PISA の「読解力」の問題例

では、学力の「質の低下」とは具体的には何を指しているのでしょうか。この問いに対する答えは、PISAの「読解力」を測る問題の内容に明瞭（めいりょう）に示されている。

PISAの「読解力」調査では、例えば「落書き」に関する2つの手紙を読んで、次のような問いに答えることが求められる。

問1：二つの手紙のそれぞれに共通する目的は、次のうちどれですか（「落書きとは何かを説明する」「落書きについて意見を述べる」「落書きの人気を説明する」「落書きを取り除くのにどれほどお金がかかるかを人びとに語る」のうちから選択）。

問2：ソフィア（手紙の差出人）が広告を引き合いに出している理由は何ですか。

問3：あなたは、この2通の手紙のどちらに賛成しますか。片方あるいは両方の手紙の内容にふれながら、**自分なり**の言葉を使ってあなたの答えを説明してください。

問4：（略）手紙がどのような書き方で書かれているか、スタイル（文体）について考えてみましょう。（略）あなたの意見では、どちらの手紙がよい手紙だと思いますか。片方あるいは両方の手紙の書き方（スタイル）にふれながら、あなたの答えを説明してください。

これら4つの設問のうち、問1と問2は従来の国語の試験でよく見かけそうな設問であるが、問3と問4は「読解力」というよりは、むしろ「表現力」を測る設問である。つまりPISAの読解力テストでは、読解力と表現

力を含めた「コミュニケーション力」が測定されているのである。そしてこのことは、21世紀の高度情報化社会では問題解決や円滑なコミュニケーションに役立つ読解力が求められていることを示唆している。したがって今回のPISAの調査結果は、我が国の子どもたちの読解力の「質の低下」に対する警鐘として厳粛に受け止めるべきであろう。

私たちが現実社会で遭遇する問題のほとんどは、正解が1つとは限らない。また、机に向かって1人で解けるような問題でもない。たいていの場合は、複数の人間が力を合わせて取り組むことによって、はじめて解決できるような問題である。このため現実社会の問題解決においては、グループで互いに意見を出し合い、議論を通して考えを練り上げていくことが重要になる。しかし、問題解決の過程で意見の食い違いや誤解が生じたり、そのために人間関係がこじれてグループが分裂してしまうようなこともある。だからそうならないためには、他者の意見を理解し尊重すると同時に、自分の意見をわかりやすく表現する能力が必要になる。つまり、コミュニケーション力を育成するためには、他者理解の能力（読解力）と自己表現力の両方を育成することが重要な条件となるのである。したがって今後は、コミュニケーション力の育成につながる質の高い読解力の指導が望まれる。

3. 相互教授法による「読解力」の指導

最後に、コミュニケーション力の育成につながる読解力の指導法の参考例として、米国の教育心理学者のアン・ブラウンらが提唱・実践している相互教授法を紹介しておこう。

ブラウンらはまず、読みの熟達者と初心者の比較研究によって、読みの熟達者は「要約」「質問」「明瞭化」「予測」という4つの読解方略を実行するために多くの時間を使っていることを明らかにした。次に、この綿密な予備研究の結果に基づいて、これら4つの読解方

略の使用を促進するための指導法として相互教授法を開発した。

相互教授法では、生徒どうしが対話をしながら学習を行う。ここでの対話とは、生徒にも理解できる一種の「ことば遊び」であり、教師と生徒が交互に学習過程をリードすることが可能なゲームのようでもある。ただし、対話の際に生徒たちが上述の4つの読解方略を用いるように指導することが重要なポイントである。

また、相互教授法では基本的に次のような手順で協同学習が進行する。教師はまず生徒たちに読解方略の模範を示す。その後、教師は生徒たちにグループでテキストの意味を構成する課題を与え、教師の指導の下で練習をさせる。教師と生徒は交互に対話をリードしながらテキストを読み進めていく。その際の対話には、自発的な討論や上述の4つの読解方略を必要とする議論が含まれる。この練習の後に、教師はグループにテキストの一節を割り当て、各節ごとに1人の生徒をリーダーに任命する。グループは黙って割り当てられた一節を読む。そしてリーダーに任命された生徒は、その一節を「要約」し、テストで聞かれそうな「質問」を構成し、難しい点を議論したり「明瞭化」したりする。そして最後には、その物語で次に何が起こるかを「予測」する。教師はリーダーの能力に応じて必要な援助をし、フィードバックを与える。聞き手役の生徒は、リーダーがテキストを説明したり明瞭化したりするのを助ける援助的コメントイターの役割を果たす。このような手順で、どの生徒も交替にリーダーとなって、テキストの意味の協同で構成するというグループの共通の目標に取り組むのである。このように相互教授法には「読解」活動と「表現」活動が巧みに組み込まれている。それゆえ、コミュニケーション力の育成につながるのである。

(もり・としあき＝広島大学大学院教授)